
beast

針戸 いと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

b e a s t

【Nコード】

N 6 4 4 9 J

【作者名】

針戸 いと

【あらすじ】

世界中に犯罪だらけの犯罪国が散らばる時代。とある少女サネと、しがない情報屋のサライは、犯罪国の1つであるバロル国にいた。

2人が出会って3年。

サネは未だ、奪われた己の記憶を、探し方も分からないまま探していた。

安らぎも癒しも禁じられたこの国で、何が出来るとも知らずに…。

少女と拳銃

そこは、真つ暗な世界。

瞼を通して、日の光を感じる。

窓の外の、鳥の声が聞こえる。

カーテンの隙間から入る光の眩しさに目が覚めた。

「まっぶしー……」

たまらず呟いた言葉は、響くことなく消えた。

ベッドの上で自分に差し込む光から逃げていると、突然ケータイがうるさく鳴りだした。

面倒くさいと思いつつもケータイに出ると、ひどく焦った声が聞こえた。

『あつサネ！？ちょっとお前今どこいる！？』

「……………」

『……その感じは寝起きだな！？』

「……表示見てから出るべきだったよ……」

相手は仕事仲間のサライ。

こいつが私に電話をかける時は、大抵タイミングが悪い。息を切らしていたから、走っていると分かった。

「切るよ」

『ちよっ待て待て待て待って……！』

「……何さ」

『いや今マジでヤバくてさ！』

「……………」

その時、電話の向こうから銃声が聞こえた。

『今の聞こえた！？オレが走ってんの屋根の上なんだけどっ』

「…切つていい？」

『サネさんオレの状況知ってる！？』

「うっさいなあ、こっちは寝起きだっつの」

『こっちは生死の境なんですけど！！』

また銃声が聞こえた。

『マジ助けてほしいんだって！』

「えーめんどい…」

『めんどいっておまーあーじゃあ外ブラブラしてるから、会ったら助けるよ』

サライの言葉を遮ったうえ、返事も待たずに電話を切った。

きつと今頃、あんニヤローとかつて叫んでんだろうな。

まあ、ちょうど腹減ってるし、コンビ二行くついでに外をブラブラしよう。

ここバロル国は、朝も昼も夜も犯罪だらけの汚れた国。

一応警察はいるものの、事件や犯罪者が多すぎて現行犯でしか逮捕できない。

一歩外へ出れば、逃げ惑う娼婦やそれを追いかけるアホ面したマフィアが路地を埋め、地下街には麻薬や煙草の臭いが立ち込める。

スラム街には怯えきつた顔のガキ共ばかり。

何があるか分かんないから、一般人を含めほとんどの人間が拳銃やなんかの武器を持っている始末。

それを政府は高みの見物…。

こんな狂った国はここだけじゃない。

どれくらいかは知らないが、恐らく世界中に同じような国がある。

まあ、それでも人々はめげずに頑張って生きてるわけで。

コンビニに行く近道をしようと、人気のない路地を歩いていると、T字路にさしかかったところで近づいて来る足音に気づいた。それと同時に「あゝあゝっ!!」という叫び声が路地に響いた。思わず声のした方を見ると、煙草をくわえ、頭をツンツンの深緑色にしている男が、全力疾走でこちらに向かって来ていた。誰なのか分かった瞬間、つい「ゲっ」とイヤそうな声を出してしまつた。

きつと顔もイヤそうだったことだろう。

あるうことかホントにサライに会うとは…。

今日の運勢は悪いかもしれない。

まあ占いとかは信じないけど。

サライは、いかにもマフィアっぽい男2人に罵声を飛ばされながら追いかけられていた。

…あのバカ何しでかしたんだか。

「ナイスタイミング！サネ！助けて!!」

こっちに向かって来ながら、もはや半泣きの目でサライが私を見る。正直とてつもなくめんどくさい。

が、このままでは確実に巻き込まれる。

「チツ、…めんどくさ…」

私はそう呟きながら、腰にあつた拳銃を構えた。

「サライ。伏せ」

「へっ…、おうわ!!」

言ったと同時に引き金を引いた。

サライがギリギリで避ける。

サライを追いかけていた男2人に弾は全弾命中。全部足を狙つた。

たちまち路地には、足を抱えて地面に寝転がる男達の、苦しみに満ちた呻き声が響いた。

それでも誰かが駆けつけることはなかった。

こんな呻き声は、どこに行っても聞こえるのだ。

私は、仰向けになってゼーゼー息を切らしているサライの顔を覗き込んだ。

「…で、生きてる？」

「…お前今“伏せ”って言ったたる…」

「それが何か？」

「オレは犬じゃねえ…っ」

「……」

だって髪型が犬に似てるんだ。

「…っ、このアマア…！」

突然、男の1人が起き上がって拳銃を私に向けた。

ドン…ッ…!!

銃声が1回、路地に響いた。

その銃声の主は私の拳銃。

「「あ」「」

私とサライは同時に声を出した。

突然だったせいで、私はつい相手の腕ごと拳銃を吹っ飛ばしてしまっただ。

拳銃だけを狙うべきだったのに。

今度は男の悲痛の叫び声が辺りに響く。

「ちよっとちよっとこれまずくないスカサネさん？」

「……」

そう、まずい。

マフィアに治らない傷を負わせるのはまずいのだ。

なぜって目を付けられやすくなるから。

目を付けられると面倒くさいから、いままでは極力避けていたのに。やっぱり今日は運が悪い。

「…ヤベー、手ガスベッター」

と棒読みで言ったら、

「絶対ウソだろ…」

すぐさまサライに見破られた。

「…サライのせいだろ。朝飯前に撃たせやがって」

「マジで寝起きだったのかよ…」

今10時半だぞ、とサライは私に軽く説教をした。

「もーいいじゃん、放つところよ腹減った」

私は、欠伸をしながらコンビニに続く道の方に向き直った。

「お前ホントどーでもいいのな…」

サライが呆れた顔で言う。

「だってそいつらヴォルチネファミリーだもん」

私より弱いじゃん、と言うと、サライは「何で分かった？」と驚いた顔で私に聞いた。

「手の甲のタトウー、ヴォルチネのじゃん」

私がそう言うと、「あーなるほど」と言っただけサライは納得した。

「しかしまー助かったわ。サンキユな、サネ」

路地を出ると、サライが話しかけてきた。

「まっただ。朝メシ奢れこのヤロー」

「礼を言ったのは間違いだっただか…?」

「…か女に助けられるって、恥ずかしくねえのかお前」

「いやいやオレは肉体労働派じゃないから。ただの情報屋だし」

サライがしきりに手を横に振りながら言った。

そう、サライは情報屋だ。

とは言っても、今のご時世、それだけでは稼げない。

「情報屋ねえ…。重宝されるわりに稼げなくね?」

「だあからお前と一緒に頼まれ屋もやってんだろ!」

「女に肉体労働押し付けて?」

「うっ…、そ、それは言うなよ…」

サライは、偶には頑張ってるだろ、と口をとがらせた。

…本当に偶にしか頑張らないから困る…。

「つーかメシならハイラ行こうぜ。エリザさんと話したいし」

「奢れよ」

「わーってるよ。仕方ねえな」

「いらつしゃいませ…ってあらつ！サネちゃん！」

店に入ったと同時に、甲高い声が飛んできた。

「…メイサさん…」

声の主はここ、レストラン・ハイラの店主をやっているメイサさん。なぜか知らんが、私はこの人とエリザさんに気に入られてるらしい…。

まったくもって理由が分からん。

「いらつしゃーい お昼食べに来たのっ？」

「いえ朝メシを」

「ええっ!？」

スツパリ言った私の顔を、メイサさんは目を丸くして見ている。

…そんなに驚くほど遅起きか。

「メイサさん、エリザさん居る？」

サライが、私の後ろからひょいと顔を出して言った。

「たちまちメイサさんの眉間にシワが寄る。」

「やあねー、あんたも来てたの？サライ」

「やあねって…。ひでー…」

「エリザなら上階《うえ》の店に居るハズよ」

ため息しながらメイサさんが言っと、サライは口をとがらせながら

「…ドーモツ」と言っ、私の方を振り向いた。

「んじゃ、オレエリザさんと話してくるわ」

「あー、うん…」

私がそう言った時、私のお腹が盛大に音を出した。

「……」

サライはそれに小さく吹いてから、私の頭をクシャクシャと撫で、「注文、してもいいけど200バロまでな」と言っただ階段を上っていった。

ムダにデカイ手で撫でてくれたおかげで、頭はボサボサ。

…400バロ食ってやろうかアノヤロウ…。

ちなみに、バロというのはこの国の金の単位。1バロは日本円で10円くらい。

ガシガシと荒く髪を直しながら、私はメイサさんに注文を頼んだ。

見ると、メイサさんの腰には、護身用なのだろう、拳銃があった。

一瞬、3年前の記憶が蘇る。

そうだ。

この生暖かくて居心地のいい場所に、この空間に、慣れては、いけない。

なぜならそう、ここは、この国は …。

真っ暗な、世界なのだから。

少女と拳銃（後書き）

どうも！！針戸　いとです。

「beast」書かせていただきました。

今回、1話目だからか、なんて言うか…勢いだけで書かせていただきました。

…まあほらっ！なんとかまとまるよこれからっ！ねっ！）。°。；
ノ）ノ

…調子に乗ってスミマセン…。

本文から後書きまで勢いだけになりましたが、今回はこれにて終わります。

もし気に入ってくださった方は、よければ2話目もどうぞ。（^
^）

あと、ついでによければ感想書いてやって下さい。待ってます…！
それではさようなら！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6449j/>

beast

2011年10月6日16時12分発行